



スヌーピーアゲイン

毎日毎日、外で何かを画用紙に写していた。

空に線を引く飛行機。ホーンテッドマンションみたいな一軒家。うんちみたいなオブジェのついた黄金のビル。

そして、ボロくてクサくてTVもない家に帰ると、色を塗って楽しんだ。

ある日、ホーンテッドマンションみたいな家の門の隙間から、スヌーピーのモデル、ビーグル犬が見えることに気づき、僕は鉄棒の隙間に目を押し付けて、一心不乱にエンピツを走らせた。

あと少し。黒い線が全体を捉える。

もう少し。細部にうつる。

「ツガワくん？」

後ろから声をかけられた。「はい」と諦めて振り向いて、僕はびっくりした。

「タマキさん」

同級生が目の前にいた。高級な格好。上品に両手で鞆をさげたポーズ。ハーフのクラスアイドル、タマキさん。

なんと彼女はこの家の子もだったのだ。

「あら」

顔を真っ赤に、硬直した僕の右手のスケッチブックを覗き、タマキさんが上品な声をあげた。

「シュタイナーだ」

どうやら、それがあのビーグル犬の名前らしかった。

「あなたの家はどこ？」

僕は下を向いたまま、後ろを指差した。

「え」トタン屋根のボロ屋を見て、タマキさんが本音を漏らした。「あれ、家なんだ・・・」

この日から、タマキさんは教室で僕に話掛けてくるようになった。

「ねえ、ドラえもん書いて」

僕はドラえもんを10秒で仕上げた。

「すごい！」

彼女が手を叩いた。その賛辞は、星を模したガラス照明のように、教室中にきらびやかな光の帯を広げ、みんながこっちを見た。

「もっと書いて」そんな影響力は知らず、彼女は次を急かした。

僕は、ちょっと考えてから、スヌーピーを書いた。

「あ、シュタイナーだ」

彼女が嬉しそうに手を叩いた。瞬く光に集まる害虫のように、みんなが僕の画用紙に寄ってきた。

そんな引力は知らず、彼女は「ね、貸して」と僕のエンピツを取って、スヌーピーの横に丸を書いた。

『ぼく、シュタイナー』

吹き出しのセリフだった。続けて、もとスヌーピーの顔にブチを書いた。

「シュタイナーの顔に、ブチがあったでしょう？」

そういつて、タマキさんは僕に顔を向けて、頬に指を指して、微笑んだ。

もうやばかった。もとスヌーピーは、もうシュタイナーさまさまだった。

僕は家のセンベイ布団で、彼女のことを思い浮かべた。耳の横でくるんとカールを描くブロンドの髪。彼女のお父さんは有名なカリスマ床屋さんだ。

僕は枕元のスケッチブックを開き、その螺旋のカールを記録に残そうとした。しかし紙面のぐるぐるは、彼女の魅力を写し取っていなかった。僕は頭を抱えた。

ベッドに力つきた僕の夢の中で、ティンカーベルが舞い、きらきらとした螺旋状の足跡を、暗闇に瞬かせていた。

ドライビンホタル

どらいぶ。

彼女からそうメールが来た晩、僕は中野駅北口にあるスターバックスに行く。

店内の座席が、仕事帰りのサラリーマンで一杯になったころ、ガラス越しに、緑色のミニクーパーがロータリーに停車する。彼女だ。白黒の動画のような雑踏で、円盤形のハザードランプが、蛍のように瞬く。

僕はカフェモカ2つをテイクアウトする。

「ありがとう」

彼女はいつも車から出て僕を待っている。上気した頬と、硬く緊張した身体を外気に当てて、これからのドライブに備える。免許を取って1ヶ月の彼女は、運転がとても下手だ。

「じゃ。行こっか」

僕に焦点を結んだ、彼女の丸い瞳に、僕は何も考えないで頷く。

そのことに、いつも後悔する。

最初は、環七のガードレールだった。左折時に、僕の左側で、地獄のすり鉢に餓鬼をおろしたような、嫌な音がする。曲がりきってから、僕は窓ガラスから後方を見る。塗装の剥がれた犯罪の証拠が、闇に吸い込まれていく。

次に彼女を見る。彼女は何も言わない。サングラスをかけているから表情も読み辛い。そのためにかけているんじゃないかと思う。

「たぶん1時間くらいで着くと思うから」

天井の取っ手を両手で掴んだ僕に、彼女はそう言う。

もっと広い道路を通る目的地にすればいいのに。

目的地を見据えた彼女に、僕はそう助言することができない。出発時に言おうとして、いつも言い忘れる。ほんのりとした、彼女の蛍のような笑顔に、意識がブラックアウトしてしまう。

僕の個人的な恋心で、事故を防止できなかったことを、僕はいつも心苦しく思う。

今日の接触事故は3回だった。

7つ通り過ぎてようやく入れたファミレスで、向かいの車のバンパーを落とした。

逃げて、行き止まった小学校の門を凹ました。

バックしようとして、右のミラーが電柱に当たって、ひしゃげた。

「ふう」彼女が息をつく。「あぶないあぶない」

いや、もうアウトだよ。赤信号になった際に、僕はガムテープで、ぶらさがったミラーを元に戻す。

「さおりさんは、なんでドライブが好きなの？」

彼女が僕を見る。ドライブに付き合ってくれる人が僕だけになってしまった彼女が疑心暗鬼にならないよう、僕も彼女を見る。

信号が青になり、彼女は前を見る。僕は彼女の横顔を見る。

「おばあちゃんをドライブに連れて行ってあげたいから」

彼女の顔が、夜道と肩を組む。口が閉じられる。微かな街灯が当たるその白い頬に、僕は彼女の可愛さを見る。

「速度を20キロ落とすといい」

彼女は何も答えない。

「僕は何時まででも付き合えるから」

僕はそう言って、目を閉じる。

彼女が僕を見た気がする。僕らは無言になる。

郊外の道路を、緑のミニクーパーがゆっくりすすむ音がある。ほのかに灯る彼女の想いが、やわらかく、深夜の世界で点灯している。

アイチャンアゲイン

タマキ家のスヌーピーことシュタイナーが死んだ。

彼は、グランドピアノの下に置かれたカゴのベッドの中で伏せ、その縁にペロを投げ出していた。

タマキさんの家族と映画を見に行く予定だった僕は、たまたまその場面に遭遇することになった。

僕と一緒に下校したチャーリーブラウンこと、タマキさん。アイちゃんは、彼の目の前に立っていた。

帰ってきたら、生から死に、くると反転していた彼の姿。

アイちゃんはしゃがみ、なんの反応もみせない相棒を眺めた。ふれようと手を伸ばして、乾いた鼻の前で止めた。

彼女の右手は、シュタイナーの手前で止まったままだった。彼女の両親は、シュタイナーと彼女のやりとりを遠巻きに見守っているようだった。カナダ人のお母さんはピアノに片手を置いて涙ぐみ、カリスマ美容師のお父さんはその後ろで訳知り顔をしていた。

そんな2人の様子に違和感を持ち、僕はアイちゃんを見直した。無表情。

彼女はまだ、あっち側にいないのだ。シュタイナーのいる生活と、いない生活。彼女の右手は、主人の素直な気持ちに従い、まだその境にいた。

僕だって、どういう態度をとっていいかわからない。ただ、いまのシュタイナーなら、かなり正確に描ける、と思った。なぜか。

彼女の右手が、死に体のシュタイナーにふれる前に、僕らは予定通り「ドラえもん」の映画を見にでかけた。壁から剥がされたポスターのように、ただ連れられるままに連れられていくアイちゃんを後ろに、僕は居心地の悪さを感じていた。複数人での遊びの要領がわからない僕を、彼女がいつもリードしてくれていたことに気づいた。学校も同じ。彼女のリードによって、僕は自分が「クラスの1名」だと思えた。

ホームルームのような映画会が終わると、僕らはカフェに入った。

「なにを書いているの」

彼女のお母さんが僕の画用紙を覗き、顔をしかめた。

それは俯いている2等身のアイちゃんだった。

「アイちゃん」

僕は画を仕上げ、彼女の肩を叩いた。

アイちゃんが画用紙を両手で持つ。

それは、2等身のアイちゃんの肩に、後ろから手を置く、顔にブチのあるスヌーピーだ。

「シュタイナーだ」

声を出して、アイちゃんは笑った。その笑顔は、画用紙のシュタイナーの笑顔よりはるかに輝いていた。

明らかに喜んでいる両親を尻目に、彼女は画用紙のシュタイナーの顔に触れてから、がさごそハンドバックをあさった。24色の色鉛筆。そして、色塗りを開始した。

学校でも、僕の画の色塗りは、もう彼女が担当だった。彼女の色の選択はすごい。青い空を緑に塗る。違うのに、僕がとらえたかった「ホニヤララ」を表す色を、いつも選ぶ。

彼女を眺めていると、彼女のお母さんが僕の頭にキスをした。「テンキュー」

すると、アイちゃんも僕の右ほほにキスをした。

家に帰ると、僕は布団の上で、彼女と僕が仕上げた画のコピーを眺めた。そして1人、2等身のシュタイナーに『ありがとうおお』と心からのお礼を言った。

コンクリートファンタジー「紙」

高校二年生の夏、わたしに対するいじめがはじまった。

九月になっても、嫌がらせと茹だるような暑さはひかず、こうして世の中はすこしずつおかしくなっていた。

教室で硫酸をかけられて、わたしは学校に行くのをやめた。

茶髪は黒に戻り、右の耳たぶは半分になり、携帯電話は未払いのため電波をなくした。

「丁度いい。店番をしてくれ」

実家は古本屋だった。祖父とわたしの二人暮らし。最初は気をつかってのお願いだと思った。一日の平均来客数が2.4人だからだ。しかしわたしがエプロンをつけてカウンターにたつと、祖父は昼の間にひっこみ、なにやら作業に専念した。暇なので、わたしは「はじめての読書」を始めた。

お洒落な本を選び、一頁目で、めげた。小学生向けの本がはじめて読み切った本になった。

落ち葉がまい、ちらちらと雪が降り、新品の制服をきた高校性たちが店頭を通り過ぎた。

わたしは床に座って本を読んだ。読み終わった本が山積みになり、わたしを、冬眠するくまのように、外界から切り離しはじめた。祖父は特に何もつっこまず、ひとまわり小さくなったような背中を見せながら、一人、作業を続けた。

ヘリコプターと飛行機の音が聞こえ、本のレンガの隙間から、道路に降るチラシが見えた。

本の部屋ができ、四角い窓から、道路をうめるチラシや新聞やパンフレットが見えた。

店の本、全9999冊を触れただけで識別できるようになると、祖父がわたしに本を書くように命じた。

「ほんとうはお前がつくるべきだが」と祖父手づくりの装丁を手渡された。

タイトルは「世界(青葉ことね)」。

わたしは記念すべき一行目に「世界は愛ではじまり、愛に終わるべき」と書いた。

「旅にでなさい」と祖父が言った。その体は実際に二回り小さくなっていた。

わたしは「いやだ」と言う代わりに本を抱きしめた。

「愛をつかまえなさい」祖父が続ける。「世界がおかしくなりきってしまうまえに」

紙の雨は、やむことなく、ひらひらと降り続けていた。

わたしはうなづく。「ありがとう。お爺ちゃん」泣いた。

祖父がうなづき、踏台に乗って、わたしの頭をなでる。

「ことね、これからお前は孤独だ。しかしおまえが愛した本が、今度はお前を愛し、守ってくれるだろう」

こうして、わたしは紙に埋もれかけた実家を後にした。

片手に持った「世界」をひらき、"べき"に削除の二重線を引き、旅をはじめた。

ゆきだるまプロジェクト

2月。雪だるまを作ることになった。

そのために、日本中のフレッシュな若者が振るいに掛けられた。

ー353番、前へ。

僕の番号が呼ばれる。

ー5番、175番。

続いて2名。

すると会場内に、ジーコ、という音が響いた。昔の電話のような音。

ジーコ。ジーコ。

人の集合する一帯の外れ、隅っこで、1枚のドア・プレートが点灯していた。パーティーに間に合わなかったホタルみたいだ。

ー奥へどうぞ。

僕を含めた計3人が、アナウンスに従い、その寂しげなドアへ向かう。

喜びか落胆か区別できない、混沌な様子の18歳500名を背に、僕はネクタイの調子を整え、ドアをくぐった。

「ようこそ」

校長室みたいな内装。でも僕らを迎えたのは、まだ若手で通用しそうなビジネスマンだった。紺色のサングラスと蝶ネクタイ。

「選ばれし君たち」両手を広げていて、とりあえず歓迎ムードだ。

「雪だるまをつくるために？」

一歩前に出た5番の男は苛々していた。僕はその横顔を凝視した。右目を潰している傷跡が、不吉を内包する地雷のように、威嚇的にぴくぴく動いた。一瞬目を合わせた僕に「独眼のウオヌマだ」と自己紹介した。

どくがん。アイスクャンディーの当たりを確かめるような気分で、僕は復唱した。

「そう。君たちはつくる。雪だるまを。いまから」

男は逆さに説明し、シャベルを取り出した。「きみたちを選ぶために、全国の授業は一部カットされた」

「わたしたちは」

175番の女性が一歩、前に出た。

「500名のトップに決まってしまった」

彼女は詩を読むように喋った。

「決められてしまった」そして何故か言い直した。または復唱した。

ビジネスマンは、満足そうに頷きながら言った。

「とある栄誉あるお方が、雪だるまをご所望なんだ。うんうん」頷きながら続ける。「雪だるまを作る人、ユキダルマーは、世俗にまみれてはいけない」

ユキダルマー、僕は復唱した。

バック、ロイヤリティー、アガリ、モウケ。ビジネスマンが、契約書を読み上げるように、話

を続ける。

「そういった2面性をはなれた場所で、作られなければいけない。ユキダルマは」
ビジネスマンが僕たちを指差した。

「君たちは、その振るいに残った。ぜひ」

お断りします。

そして。選ばれた3人で、スターバックスに出掛けた。オープン席はまだ肌寒くて、ラテが美味しく感じれた。

彼女には、コンプレックスだという身体的特長があった。

右の目の下に、下睫毛からインクが零れたようなシミがあるのだ。

その印は、思春期の彼女に髪を伸ばさせ、ニット帽を部屋にコレクションさせ、彼女を俯かせ、また剣の道に向かわせた。彼女の部屋の写真立てに飾ってある、高校時代の彼女は、剣道の防具に全身を包まれている。

僕は、彼女が社会人になってから出会った。彼女は、10年かけて選び出したファンデーションを塗っていたため、僕はその特長に気づかなかった。だから、そのシミに気づいたのは、僕と彼女がはじめての夜を過ごしたときだ。

僕は裸で寝ていた。気づくと、ペニスをまさぐられていた。どうやら彼女の手だ。僕は夢見心地のまま、「どうしたの？」と目の前の、彼女の頭頂部に、聞いた。

「なんか、変な気分になっちゃったみたい」

彼女は、とても控えめな性格だと思っていた。

彼女の後方にある大きな曇りガラスの向こう側に、大勢の人の気配がした。どうやら彼らは公園に向かって移動しているようだった。その先には森に囲まれた芝生広場のある、大きな公園がある。掛け布団と曇り硝子の溶け合った、ぼやけた焦点で、僕は、彼らがセックスをするために移動しているのだと理解していた。その夜と野生の熱に当てられたらしい彼女は、僕のペニスをまさぐり続けていた。

熱に浮かされた僕は、彼女の頭を撫でた。彼女が顔をあげる。そのとろんした右の瞳の下に、半月状の染みが浮かんでいた。その黒い染みは、僕の脳裏に、感光するように、焼き付いた。夜の海に浮かぶ三日月のようだ、と思った。

そして僕らは、2回目のセックスをした。もちろん、公園にセックスのために向かう集団は、眠気とエッチな気分惚けた、僕の気のせいだったのだろう。

僕らは、パートナーになろう、と一緒に暮らし始めた。

日中は、同じ職場に、単なる同僚として出勤した。それ以外の時間、僕は作家になりたかったので文章を書き、彼女は好きな人のサポートをすることに憧れていたのので、家事に努めた。

僕は、自分に自信のない、僕のサポートをしてくれる彼女を励ましたくて、彼女を主人公にした物語を書いた。原稿用紙の上の彼女は、稲よりもしなやかな剣を持ち、悪そうなトマトやタマネギ、怪人や宇宙人を次々に一刀両断した。

ある日。完成したその原稿を出版社に持っていく道中、僕は不良集団に囲まれた。22時の公園は、人気なかった。彼らは、とても悪そうな視線を僕に向けていた。僕は、命よりも大事な原稿を胸に抱えて、しゃがみ込んだ。

しばらくして目を開くと、10人くらいの不良少年たちは、全員が地面でのびていた。

立ち上がると、竹刀と買い物袋を持った女性が、電灯の下に立っていた。

振り向いた女性の右目の下には、彼女の印があった。夜の雲間に浮かぶ、三日月と同じ彼女の笑みが、僕の口元も微笑ませた。

コンクリートファンタジー「拳」

誕生した妹は、生まれてはじめて見たガラス細工のようだった。

「にーに。おうま」

そうやって妹が現れれば、時も場所も選ばず、おれは四つん這いになった。

徹夜コースの試験勉強の最中であろうが、毎週欠かさず見ている仮面ライダーを見ていようが、彼女とのセックスの最中であろうが、だ。

「トーマ。おうまさん、やって」

と一度彼女が両手を広げて求めてきた。「なにいつてんの？」と舌打ちを返した。おれが人間をやめるのは、お姫様が乗馬をしたくなかったときだけだ。

妹は6歳のとき、しゃぼん玉の魅力にとりつかれた。

「しゃぼん、しゃぼん」

としゃぼんの玉が世界に浮かび、満ちる様子に、文字通り両目を輝かせた。それは毎晩の日課になり、それを見る妹の反応が、日によって異なるようになっていった。つまりポジティブな反応と、ネガティブな反応だ。妹が泣いたとき、おれと母親は「明日は雨かもね」と話し合う。そして意外と当たった。一年も経たないうちに、世の中のお天気お姉さんは、我が家にとって存在意義をなくした。

ある日、しゃぼん玉を眺めていて突然、妹が泣き出した。終わることのないスコールのような、泣きっぷりだった。母が吹くのをやめると「だめ！」と妹は雷鳴のような悲鳴をあげた。母はおろおろしながらシャボン玉を吹いた。我が家の一大事だった。お姫様の乱心がおれの頭を沸騰させた。考えることを放棄し、シャボン玉を叩き割った。「あたたたた」妹は泣き止んだ。

おれは15歳になって、道場に通り始めた。中国武術。攻撃の速さを得るために。基本の立ち方「馬歩」を自宅でひたすら練習した。スタンスの広い空気椅子のようなポーズだ。妹は、モモの上に座り、しゃぼん玉を吹いた。思春期に入ったのか、物思いにふけるように眺めている時間が増えた。妹は変わり者と言われた。遠くのものを見るものが嫌いだった。双眼鏡。テレビの中継。グーグルマップ。あと、いつも思いつきで行動した。後ろめたさやためらいは見られなかった。常識から目を背けているように思えた。

「あ」ある日妹が言った。「世界が、おかしくなりかけている」

妹に肩をたたかれ、おれは半眼にしていた両目をひらき、部屋に浮かぶ無数のシャボン玉を眺めた。妹の両目から涙が流れた。連拳をしようと息を吸ったおれを、妹が制した。「これ」妹はひとつのシャボン玉を指差した。「孤独で雨を降らすことのできる人がいる」そして困ったような笑みをおれに浮かべた。「探して。彼が世界の隅までかかる雨を降らせることができれば、世界は救われるかもしれない」

その瞬間、そのシャボン玉は地面に落ちた。反射的にキャッチしたおれの耳に「それはわたしの代わり。守ってね」妹はおれのももから崩れ落ちた。目が覚めることはなかった。

おれは旅をはじめた。

右の手の平に、小さなガラス細工のシャボン玉を持って。

未練召還

私は、ある私的な事情から、昔付き合っていた彼女を召還することができる。

「ひいっ」

同僚が、悲鳴をあげる。「たすけて、神田」私の名前だ。

傍に向かうと、彼（田辺）は一般事務職の女性陣に囲まれていた。彼女たちの姿勢や表情から察すると、これから彼はフクロにされるようだ。

「ズタボロよ」

人事部にも顔が効く、アラフォーの鬼塚さんが彼に一步近づいた。「こっそり、私たちをつまみ食いにしやがって」

田辺シスターズは、総勢7名だった。

ひい。と田辺は、床に尻をつけて、身体を丸めた。退行しかけている彼に、誠意を尽くすことはできなそうだった。

私は背後のホワイトボードから、水性マーカーをとりあげ、彼の後ろに円を書いた。

「神田。あんたは、そっちだ？」

アラフォー（around 50）の黒川さんが床にツバを吐いた。私は彼女の唾液の墜落箇所を一瞥して、作業に戻った。人の性的嗜好というものの、悠久の幅広さ。それに想いを巡らしながら、私は魔法陣を仕上げた。

カタカタカタ。

と、オフィス中のデスクが揺れはじめた。社員たちが辺りを見回し、仕事を忘れる。フロアが消灯し、真っ暗な中に、ぼおお、と私の昔の彼女が、出現する。

足のない、その霧状の姿に、田辺シスターズの面々は悲鳴をあげた。「ゴースト！」誰かがそう言って、方々に散っていった。結成後、間もなくの解散だった。

「ありがとう」

私は、召還した昔の彼女にお礼を言った。「さゆり」

全身が現れた、質感の朧げなさゆりは、頭をひねったり、手足をぶらぶらさせたりした。彼女は白衣を着ていた。工作中だったのだろう。彼女の挙動に合わせて、その輪郭に浮かぶ、実体のない水滴がきらきらと、オフィスの真っ暗闇に、透明な瞬きを与えた。

転送された身体と、周囲の景色に慣れないのか、しばらく彼女はきよろきよろとしていた。そして、結論を見出すように、目の前の私を見た。

「さゆり」

私も見返した。二人の間で流れた時間を共有しようとするように。それは未来のない、無限の空間だった。

やり直そう。

そう言いかける前に、彼女が私に手を伸ばし、その掌がバチバチと火花を立てた。

ぎゃー。

感電した私は、たまらず床に突っ伏した。

「便利だな、それ」

平常を取り戻した田辺がそう声を掛けてきたとき、さゆりはもう消えていた。

さゆり・・・私は、彼女が立っていた、空虚な円に眩いた。

この力のおかげで、私は新しい恋人をつくることができない。でも、さゆりに会えて少し嬉しかった。

金子さん

「金子さん」

声に振り向くと、佐々木さんはベッドに寝たまま、目を開けていた。

「なんですか」

一瞬戸惑った。私を呼ぶ声が、彼女の口から出たことがすぐに信じられなかったのだ。老齡のせいもあるだろうが、死んだように眠っていたような彼女の姿は、深い森に打ち捨てられた袋のようだった。白く乾いた皮膚。カサブタか染みか分からない、茶色の斑点。

「もう」彼女は空気を失った魚のように、口を無意味に動かした。「いいから」

「いま冷蔵庫掃除しましたから」私は、彼女の気遣いに覆いかぶせるように、言葉が続けた。「みかん、新しく買ってきますね」

彼女は、何も答えなかった。天井に投げられた視線にだけ、生を感じた。入院する前、ほんの一ヶ月前は、食後に日本酒を呑み、お酒の飲めない私には抹茶を点ててくれた。彼女は茶道の先生で、私はただの家政婦。

お財布、置いていきなさい。

誰かが言った。

というのは、彼女の口の動きを認められなかったからだ。嫌に暗い声だった。

そのくらいいいですよ。遠慮はいらないです。

そう口にしようと思った。お金についてやりとりをするのが嫌だから。でも、声は出なかった。口と目を開けて中空に向く彼女と、それを載せる白いベッドに、私は寒気を感じ、黙って病室を出た。

病院を出て、スーパーに走った。面会はあと30分。夫に先立たれた彼女に見舞いはない。孫がいるが、会ったことはない。彼女の締めくくりに、私は「死」のモデルを見ようというのか。意地になっていた。

近くのスーパーに、みかんがなかった。私は丁度来たバスに飛び乗った。

ドアが閉じたところで、私は財布を持っていないことに気づいた。訝しく思ったところで、運転手が私に言った。

「あなたは今晚、食後の珈琲を我慢できますか」

「はい？」

私に向く、瞬きのない視線に、可能かなという意味で私は斜めに頷いた。

バスが動き出した。

大きなスーパーマーケットが見えて、私は降りた。美味しそうな、他のより30円高いみかんを選んだ。ついでにヨーグルトとゼリーとブランケットをカゴに入れて、レジに入った。

レジスターのおばさんが、私の顔を覗き込んだ。近い。

「今月一杯、おやつ抜き。できる？」

私は頷いた。

彼女がビニール袋をカゴにのせた。スーパーを出て、すぐにタクシーを呼んだ。

「病院まで」

病院に着いたとき、面会時間はあと十分だった。ちーん、と運賃表示が1,800円でとまる。運転手が振り返った。不自然に見開いた両目。

「あなたは、毎朝飲んでいる野菜ジュースをこれから一ヶ月間」

「できます」言い捨てて、タクシーを降りた。

病室で、彼女はまだ寝ていた。出たときと変わらない、佐々木さんの姿を見つめた。消しようのない、得体の知れない黒い何かが、私の胸の奥で沈んでいた。

もし、いま彼女が5,000円を私に手渡せば、それは霧散するだろう。

決して叶わない現象に、私は動きをとめていた。

干ポケット

あまり笑わない子だった。

誰かに目を見て話しかけられたとき、小石を落とされた水たまりのように、波紋のような静かな微笑みを返すだけだった。

彼女は職場の新人で、僕は1年ばかり先輩だった。

社会人になってはじめての後輩で、僕ははじめての先輩になって。そのせいもあったのかもしれない。僕は彼女を笑わせたかった。

「おはようございます」

カウンターチェストの裏に隠れて、僕は出勤した彼女に挨拶をした。

「おはようございます」

少し時間を置いて、彼女は挨拶を返す。カウンターの上に置かれたドラえもんに向かって。僕の身代わりを努める彼のポケットの中には、ポッキーを一袋、入れていた。僕からの、ささやかな退院祝いのつもりだった。

彼女は、ポッキーを一目見て、僕を見下ろして軽くお辞儀をすると、タイムカードをおした。かしゅん。

頬がこけているせいか、彼女の視線にヒヤリとしたものを感じた。彼女は、針でさされたように、目を細め、どこか辛そうに見えた。彼女は僕の横を通過して、自分のデスクに向かった。

仕事がこなせない。人間関係に行き詰まっている。プライベートにトキメキが足りない。

体調を崩した彼女について、職場では様々な憶測が飛び交っていた。それは多面的でクリエイティブで、無責任だった。

僕はしゃがみ込み、ドラえもんを足の間に挟んだ。

胸中に、残念な気持ちが、ちっとも固まることのないチョコレートのように、用途なく鎮座していた。

ぽきん、とドラえもんのポケットの中のポッキーが折れた。

僕はどうやら、彼女が好きになってしまったようだった。

「なにやっているの」

上司に声をかけられ、僕はドラえもんをタイムカード機の横に置いて、デスクに戻った。

退勤時、ドラえもんにポッキーを託したままであることに気づいて、袋を取り出した。中を空けると、ぜんぶ折れていなかった。ポッケの奥に、ポストイットが一枚はいつていた。

「ごちそうさまでした」

さっぱりと、感情表現なく、一言かいてあった。

これだよ、と僕は心の中でガッツポーズを取った。実はポーカーフェイスに徹しきれていなくて、僕の肘があたったドラえもんが、床に落ちた。

僕は、会社を出てから、職場に戻り、一度は鞆につめたドラえもんをタイムカード機の横に置いて、帰った。ポケットに「ありがとう」と付箋をしまっておいた。

次の日、ドラえもんはそこにいなかった。僕のデスクの上に置いてあった。「忘れ物」と頭の

上にセロハンテープで伝言がつけてあった。可愛げのない上司の字だった。僕は上司のデスクに眼を飛ばした。でもポケットのなかには「いえ」と書いたポストイットが入っていた。

僕はデスクに向かって、「よし」と言った。職場に、いかにドラえもんの置き場所を確保するか、考えよう、と思った。

僕の仕事の調子は、上々だった。

彼女は魔法使いだ。

彼女が起こす、不思議な現象を「魔法」と括って良いのか、僕には良くわからない。でも、少なくとも、僕くらいはそう名付けてもいいかと思っている。

だって彼女は会社で、遅刻をするし、居眠りもするし、連携はとれないし、期限も守れない。僕は職場恋愛という地雷地帯に踏み入ってまで、そんな彼女に交際を求めたのだ。自分で理由を付けられない「僕の心を振るわせた彼女の何か」に、子どものころ周囲に描いていた星々を重ねて、一体誰が迷惑すると言うのだろう。

枕に預けた頭の裏で、鼻歌が聞こえる。

「どうしたの」

薄闇の中、僕は隣でうつぶせになっている彼女に聞く。僕は仰向けになる。

「ん」

彼女は答えない。僕の手が触れた彼女の背中、肌を合わせたあとの、独特の蒸したような熱っぽさがまだ残っている。

僕はしばらく、彼女の鼻歌を聞いた。あと上を見上げていた。天井は見えなかった。ただ、布が何層にも重なったような質の厚みを、闇に感じていた。彼女の鼻歌が、縫い物のように繊細だったからかもしれない。

がさごそとした音が耳に触れ、僕は彼女の顔に自分の顔を寄せた。

彼女は枕の上で、何かをいじっていた。

バクと黒猫だ。それは枕元に置いてある、うちの木彫りの置物だ。手の平サイズ。

2匹は、彼女の左右の手で一つずつ、枕の上を行ったり来たりさせられていた。

「ぶー」彼女は言った。どうやらバクの声だ。

「にゃー」僕は言った。へへへ、と彼女は、僕の背中に頭をのつけた。

「なにをしているの？」

僕は、出来合いの舞台のような、バクと黒猫のやり取りを見た。

「ちょっと待ってて」

彼女はなぜか、声を潜めるように言った。部屋には誰もいないのに。

僕は黙って、彼女のショウを見物した。僕はまだ遠慮がちだったのだ。まだ、2人の時間の過ごし方は試行錯誤している段階だったし、今日は彼女がウチに泊まりに来てくれたのだ。

次第に、彼女の手が気にならなくなってきた。その指も、肌色も、輪郭も。彼女の匂いのする暗闇に、薄れていった。

いつか、バクと黒猫は僕らの手を離れていた。クッションの舞台を、飛び跳ね、牽制しあい、ふれあうように、身体をあてあつた。

「え」

僕は自分が寝惚けていたことに気がついた。木彫りの置物が一人で動いていることの意味を認識したからだ。

その瞬間、2匹は枕で倒れた。

あーあ。

クッションにはじかれ、床に落ちた黒猫を拾いながら、彼女は呟いた。

僕は腕を組み、首を傾げた。こんなに首を傾げても意味ないだろう、と後で思ったけれど、とにかく僕は首を傾げるしかなかった。うまい裏付けはなく、頭の使いようがなかった。

彼女の腕が、背後から僕の首を抱きとめる。

わわ。

と僕は後ろにのけぞる。

「高山さん、好き」

彼女が包み込むように、僕を後ろから抱きしめる。

いや、あのさ。

彼女が僕のうなじにキスをする。

・・・まあ・・・いいか・・・。

僕は、彼女の力で、僕の家ベッドのぬくもりに沈められる。

一緒に寝る

まず彼女の顔をさわった。両手でなでると、なぜか、黄色いタオルを詰めた揺りかごを思わせた。同じ25歳とは思えない触り心地だった。

むう。

と声を漏らし、彼女は細い右手で僕の両手を払った。しばらく黙っていたら、また寝息を立てたので、どうやら起きてはいないようだった。

僕はさわるのをやめ、彼女と向かい合わせで寝ながら、その顔を眺める。世界地図に未開を求めるような、大きな気持ちで。

タマゴみたいな形。そこに人が人であるためのパーツを貼り、髪をすっぽり被せ、呼吸の道を通し、戸田彩25年のトンネルをくぐらせると彼女が誕生する。

どゆわー。

僕は小声で叫び、彼女の腕をウルトラマンの飛行ポーズにする。

たまごみたいなアヤちゃん。

と口にする、少し声が大きくなってしまったのか、僕の腹部に彼女の蹴りが入る。

うぐ。

痛みを訴求するために見ると、彼女は薄目をあけた。

「なに」

「いや、なんでも」

と僕は、アヤちゃんの頭をなでなでした。「おやすみ、マイラバー」

校了前で、わたしは疲れているの。

帰ってきたときのセリフを、彼女は目でもう一度言った。

うんうん、すべてわかっているよ。と僕は目で応えて、頷く。

彼女は、しばらく僕を睨んでいたが、しばらくすると目がとろんと力を失う。僕は一生懸命頭を撫でる。寝て。寝ろ。寝てください。

僕の仕事が悪かったのか、彼女がまた寝息を立て始める。

僕は彼女から手を離し、ふーとため息をつく。

次はタオルケットのはがれた彼女の胸に目がいってしまう。

どのくらい柔らかいんだろう、とってしまうともうだめだった。

夜の沈黙、その黒いオーロラの密度が細やかになる。

僕そっと、パジャマから覗いている谷間の脇に指で触れる。

ん、と彼女が声を出す。

辛抱強く触れていた指が、その天使のような柔らかさを確認する。指を離す。

合体したい、と僕は切に思う。

でも彼女は疲れている。

僕は、彼女の肉体に狂ってしまった指を両足の間にはさみ、僕らの生活の闇に、いき詰まった想いを浮かべる。

したいように、2人暮らししたからと言って、意外と思う通りにはいかない。それが2人暮

らし。

でも彼女は仕事が忙しくて、僕は辞めた。だから疲れに差がでる。それぞれの夜の質が変わる。それが実際。

僕は、次に見つける仕事を思う。

できるようになって、もっと格好よくなる。彼女にとって。

僕はその万里の長城のような道程の長さを思う。

ねえ、と僕は彼女に声にならない声で話しかける。

僕は、これだけ君を想っているよ。

しばらくして

むう。

と彼女が声を発する。寝言だ。

同じベッドにいても、その世界の端から端までは意外と遠い。

でも寝息かわいいな、と僕は同棲という彼女との関係に幸せを感じる。

ツクンアゲイン

アイちゃんとは、中学に入ってから、遠くなった。学校は同じだけれど、別の友達の輪に入り、一緒に歩く機会が減り、なんとなく同性以外に話しかけ辛くなり、思いつきを伝えるために彼女のもとへ向かう足は重くなり、そうやって僕らは別々の存在になった。

僕は友人とカラオケやビリヤードに出かけ、獲物を囲む部落民族のように、おたけびをあげ、頭をうめる熱に夢中になった。絵を描くのは、授業中だけになった。ノートや答案の隅に先生や友人の顔を書き、僕は自分のスケッチが上手であることを知った。

「玉城ってやりまんらしいぜ」

それを友人から聞いたのは、中学3年生になってからだった。

やりまんの意味を聞いて、僕は「へー、でまじゃねえの」と、ノートにドラえもんを描いた。知っているのは彼女の両親が離婚したことくらいだった。ひどく安っぽいドラえもんは、紙から1cmも立ち上がらなかった。心臓の動悸が僕を打ち、胸の熱さは家に帰ってからも、僕の頭を一色に染め上げていた。20時。玉城家に電話するとアイちゃんが出た。「ああ、ツガワ君」いつかのように、ツクンとは呼ばれなかった。それはモグラみたいに抑揚のない声だった。僕は近くの公園に来て欲しいと伝えた。

30分後、僕らは公園のドームの中で隣り合って座った。

「好きだ。付き合ってください」

僕は地面の砂に被さる暗がりと言った。アイちゃんはなかなか喋らなかった。でも驚きのような吐息が、闇の粒子の何粒かを輝かせた。その煌めきに僕は、かつてのアイちゃんの何かをリフレンしていた。

彼女の目から涙が流れていた。驚いた僕に、彼女は表情のない顔を向けた。

「わたしと、する？」

僕の全身に鳥肌が立った。身がすくみ動けない僕を、彼女は射抜くように見た。

「さようなら」

彼女は立ち上がろうとした。引き止めようとしたけれど「あ」という声しか出なかった。それでも彼女は振り返った。

彼女は僕に口づけした。そしてドームから消えた。

またいつもが始まった。やっぱりカラオケに行き、ビリヤードに行った。でも、どこにいても絵を描くようになった。歌を歌う田中。ブリッジを構える中島。ノートをうめ、僕は何かを辿っていた。

「なにかが違うんだ」

就寝の闇に浮かぶ、アイちゃんに僕は呟いた。

「コンクールに出さないか」

そう提案してきたのは、僕のラクガキを注意しにきた数学の先生だった。

それだ、と思った。

僕は美術部の部室にこもって、ひたすら絵を描いた。下絵は上手くいくが、そこまでだった。

床に落ちた50枚の絵を見て、美術部の先生が言った。

「カメラみたいな絵をかくね」

それだ、と思った。僕はかつてのアイちゃんが色を塗ったスケッチを押し入れから取り出し、彼女の色塗りを真似した。

『アイチャンアゲイン』

それが完成した絵のタイトルだった。

入賞は逃した。けれど、展示のタイトルの札に「ツクンダイスキ」のラクガキがあった。

これが僕の告白だったと気づいた。